

『韓国・濟州島と沖繩』

本書は、南島文化研究所叢書の二冊目となるものであり、琉球列島の島々を対象に地域調査に取り組んできた沖繩国際大学南島文化研究所が、この十年にわたり、韓国に調査対象地域をひろげ、沖繩との比較の視点から、まとめられたのが本書である。

評者自身も、この十年余り、韓国を地域調査の対象として、濟州島を含む各地を訪ね歩き、その成果を『韓国・伝統文化のたび』と題して、二〇〇八年に出版することができた。

その過程で、気になったことが、韓国の民俗文化と沖繩のそれとの共通性であった。かつての日本民俗学は、沖繩の民俗を日本のルーツとして扱ってきたが、評者自身は沖繩を訪れる度に、そのような立場に同感できなかったのであるが、韓国を歩きはじめるようになって、日・琉・韓の民俗間のトライアングルな構造に注目しはじめた。とりわけ、二〇〇一年夏の韓国滞在時に

琉球大学の民俗学者である津波高志教授と親しく会話する機会に恵まれ、沖繩と濟州島の民俗の有する共通性に共感するに至った。

本書は、その視点を具現化したものであり、地理学のみならず、日本史や東洋史の研究者の方々にも知ってもらいたく感じたことから、本誌の紙面を借りて紹介するのである。

さて、本書の内容は、八本の論文から成り立っている。冒頭に「濟州島の地域性」、次いで「韓国濟州道土壤の特性」、「濟州島における水利用の現状と今後の課題」、「沖繩と濟州島の高麗瓦」、「韓国濟州島における施設園芸とミカン栽培農業の変化」、「濟州自由都市の出帆と濟州経済発展の可能性」、「濟州特別自治道・珍島郡の観光資源と観光関連産業」と続き、最後に「楸子島の魚介類相」で終わる。

それぞれの論文を詳しく紹介するだけの余裕はないが、人文地理と自然地理の現地調査の成果を巧みに融合していることが特徴として指摘できる。それは、かつて評者が『季刊地理学』四十九巻四号で紹介した中公新書の高野史男著『韓国濟州島』の成

果を継承しているものといえよう。

もうひとつの特徴は、濟州島をめぐる最近の韓国政府による政策的側面がフォロワーされていることである。濟州島を中心とする島嶼部は行政区画として濟州道とされてきたが、その濟州道が韓国で初の特別自治道として、二〇〇六年に指定され、大きな自治権を与えられたのであり、本書はその経緯を詳しく記した日本語での最初の文献ではなからうか。

その後の政権交代などもあって、この特別自治道は必ずしも効果的に機能していないとの報道を目にしたこともあるが、論文の後半では、一周年を迎えての成果と課題についても詳細に触れられている。

さらに、沖繩との比較の視点もまた、大きな特徴であり、濟州道の特別自治道への指定は、沖繩における自治権の拡大に向けて、大きな参考となるろう。本書でも、沖繩県が推進してきた「国際都市形成構想」との類似点が強調されている。

評者が、二〇〇一年の夏に現地調査を行った際に、韓国本土の大都市から空路を利用して訪問する観光客のほとんどが、レンタカーを利用して島内をめぐることに

に驚いたが、沖縄も同様の観光スタイルが定着しつつあり、お互いに目指すモデルは共通であることを、本書を読み進めながら改めて認識させられた。

以上のように、本書は、東アジア世界の国という領域を超えたところでの共通性を有するふたつの島々を地域比較するという視点に立った国際的な地域研究の成果であり、東アジアの時空間を新たな切り口から再構成したものととして、高く評価することができる。

(B6版 二四一頁 二〇〇九年三月)

編集工房 東洋企画 税別一五〇〇円

(岩鼻通明 山形大学農学部教授)

### 受贈誌

(二〇〇九年十二月七日)  
二〇一〇年二月十五日)

- 文化史學(文化史学会) 六五
- 大美和(大神神社社務所) 一一八
- 八坂神社 文教課報(八坂神社 文教課) 一三
- 海軍史研究(日本海軍史学会) 六六
- 社会経済史学(社会経済史学会) 七五―二
- 国際文化研究所紀要(横浜市立大学大学院 国際文化研究科) 一六
- 一橋研究(一橋大学大学院一橋研究編集委員会) 三四―三(通巻一六四)
- 一八一―一
- CHRONOS クロノス(京都橘女子大学女 性歴史文化研究所) VOL.111
- 文化(東北大学文学会) 七二―三・四
- 文化(東北大学文学会) 七三―一・二
- 歴史(東北史学会) 一一三
- 専修史学(専修大学歴史学会) 四七
- 人文地理(人文地理学会) 六一―五
- 國史學(國史学会) 一九九
- 日本常民文化紀要(成城大学大学院文学研 究科) 二七
- 国立台湾大學 考古人類学刊(国立台湾大 學大学院人類学系) 六八
- アジア研究所所報(亜細亜大学アジア研究 所) 一三七
- 国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民 俗博物館) 一五三
- 国立歴史民俗博物館年報(国立歴史民俗博 物館) 五
- 大分県立歴史博物館 研究紀要(大分県立 歴史博物館) 一〇
- 信濃(信濃史学会) 六一―一二
- 韓國史研究彙報(韓國國史編纂委員会) 一 四七
- 立命館国際平和ミュージアムだより(立命 館国際平和ミュージアム) 一七一―二
- 皇學館大學史料編纂所報(皇學館大學史料 編纂所) 二二三
- 皇學館大學史料編纂所報(皇學館大學史料 編纂所) 二三四
- 日本史研究(日本史研究会) 五六八
- 經濟論究(九州大学大学院經濟学会) 一三 五
- 史迹と美術(史迹美術同致会) 八〇〇